



手縫いの作品が展示された部屋で安江顧問の紀州での近況報告から始まった総会。議事内容は全て承認していただきました。その後ティーサービスで出している手作りの菓子とコーヒー紅茶を試食していただきながら会員と渡辺先生の交流が始まりました。

感想文から総会の雰囲気と渡辺先生の講演内容をお伝えします。

- ・安江先生が紀州の寒い冬から春になった今、幸せでいつ死んでもよい時だと楽しそうに人生を語られる。そうだと、もういつ死んでもよいのだと確認しました。肩を張らずに終りがあるといいな。
- ・柴山さんのご主人が来て下さったのが何よりも嬉しかった。最期まで自分の意思で自分の道を選択してそれを勇気を持って家族や先生に伝え、一生懸命に生きられた尊敬する友。それでも看取る側の苦しみは、はかり知れないものだったんだと知りました。ご主人の話に感動しました。ありがとうございました。
- ・心に残った言葉
 - ①ターミナルは生きてきた課題が整理できるチャンスだ。
 - ②介護者（ボランティア含）は自分の価値観を白くして相手に対応すると良い。
(相手が赤であれば赤に、青であれば青になれるように)
「自分が経験したことがないようなことがあっても、経験したかのように振舞う」(常に平常心)
 - ③社会で傷つけられた人は相手を傷つけようとする。それを理解すること。
- ・孤独な高齢の患者さんの話に心打たれました。セクハラとしてみるのではなく死を前にして患者さんの抱えている課題としてケアする。その人のバックグラウンドを深くみつめて寄り添っていく話は実践の中からできた「本物」のお話。感動した。スキンシップこそ心を開かせるものだと教えられた。
- ・「モルヒネは体内にあるもの、それが足りないから補うだけ。痛みの経路を体が覚えないうちに補う」。実に分かりやすい説明でした。
- ・あたたかい総会でした。おいしいお菓子ありがとうございます。
- ・渡辺先生の話し方、声がとてもやさしく思えます。それだけでも患者さんの心は癒されると思います。相手の気持ちをだいじにしてお話しされるので、こんないい先生にお会いできて私はとてもうれしい。
- ・渡辺先生にプレゼントされた5本指の靴下、気持ちよくて私も手放せません。



「憶念」

待つ春を

数えて感謝のいのちかな

小久保良

私は、現在、がんと闘い、がんと共に生きる生活を送って、一年余になり、二回目の春を迎えました。がんの告知と切除手術を受けた頃は、ただ「死にたくない」・・・「神様、なぜ私を助けてくださらないのですか!」・・・と悲しさと苦しさでねむれない不安の日々が続きました。お世話になつた多くの方々の励ましの言葉も、素直に受けられず「生きたい!」・・・という渴望ばかりで、周りが見えなくなっていました。すがるような祈りによって自分を慰めたり、「がんと治療」に関わる書物を読み漁りもしましたが、生きる気力の落ちてゆく自分をどうすることもできませんでした。

そんな日々が続く、次第に「生と死」とは何か?・・・人間の「運命」とは何か?など今でもあまり考えたことのない現実に対峙するようになりました。時間が通りすぎるような日々の中で、自分なりの運命がわかってきたような気がしました。それは、神の恵みによりこの世に生を受け、家族にささぐられた方々にご支援をいただきながら、七十年間も私の「命」を「運んで来てくださった」・・・「生きていく」ということは、多くの方々に「生かしていただいている」という真実を実感したことでした。

そして、心からの感謝の日々を送っているうちに、不思議に「死への恐怖」も「生への渴望」もなく、いま「生きていく自分の存在」を再認識し、「生きていく尊厳」を身に沁みている。

三回目の入院の折、主治医から「手術が成功しても生存率二年以内は五十%」と言われました。いつまでの余命、定命かわかりませんが、現実を直視し、命のある限り「がんに負けないように!」明るく力強く生き抜いて行こうと、毎日毎日有意義に大切に過ごしています。

「神の恵み」と「皆様のご恩」をいつまでも忘れずに、心に深くとめておきます。

なお今いただいている仕事やお付き合いにつきましては、今後とも、今まで通りお気遣いなく普通にさせていただきます。最大の喜びですので、重々よろしくお願い申し上げます。

皆様のご健勝とご多幸を心から、お祈りしております。

多謝

「患者の気持ちを知ってほしい」と会員の小久保さんから

ご主人の文をいただきました。

